



TITLE:

佐波教授逝く

AUTHOR(S):

経済学会

CITATION:

経済学会. 佐波教授逝く. 経済論叢 1968, 101(5): 484-490

ISSUE DATE:

1968-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/133272>

RIGHT:

經濟論叢

第101卷 第5号

哀 辞

故佐波宣平教授遺影および原稿

- ミュール型紡績工場堀 江 英 一 1
- 部門間の連関構造山 田 浩 之 雄 23
井 原 健
- 原価管理思考としての変動予算概念野 村 秀 和 43
- 低開発国開発計画における技術選択名 畑 恒 64

記 事

佐波教授逝く

追悼講演（山田浩之 前田義信 谷山新良 森嶋通夫 上田三四二）

追 憶 談（葛城照三 安間進）

故佐波宣平教授自作年譜

昭和43年5月

京都大學經濟學會

記 事

佐波教授逝く

佐波宣平教授は、昭和43年2月29日午前11時20分、肝臓癌のため逝去されました。享年63歳。

佐波教授は、昭和5年3月京都帝国大学経済学部を卒業、昭和9年3月同経済学部を迎えられて専任講師に就任、昭和13年助教授、昭和21年7月教授に昇進されました。その間、保険論、交通論、海運論、最近では数理経済学などを講義され、昨年（昭和42年）12月6日退官記念講義をおこなわれました。

佐波教授は、退官講義のさい、御病気の苦痛にたえられながら、切々と学問の道を説かれ、最後にご自分の死を予告され、別れの言葉を告げられました。教授の御病状ゆえに、教授の御無事な御退官をお祈りしておりましたが、その甲斐もなく逝去されましたことは、まことに哀悼にたえないところであります。佐波教授は、保険論、交通論の分野において偉大な業績を残されましたが、晩年には数理経済学の研究においても輝かしい貢献をされました。その間、学部学生の教育、大学院学生の指導においても、その功績ははかり知れないものがあります。また、昭和26年に心筋梗塞で倒られて以来、相次いで襲いくる病魔と闘いながらの研究ぶりはまことに驚歎に値するものでありました。教授はご自分の死を正面からみつめられながら、きびしい研究者の道を最後まで歩まれたのであります。

佐波家では、3月2日自宅にて密葬がおこなわれ、本学会においては、3月12日教授の人柄と学問的業績をしのび、下記のとおり、京都大学経済学会葬をおこないました。

故 佐波宣平教授
京都大学経済学会葬
式 次 第

- | | | |
|---|---|---|
| 1 | 開 | 会 |
| 2 | 黙 | 禱 |
| 3 | 弔 | 辞 |

京 都 大 学 総 長	奥 田 東 殿
京 都 大 学 経 済 学 部 長	山 岡 亮 一 殿
日 本 交 通 学 会 会 長	島 田 孝 一 殿
日 本 保 險 学 会 代 表	椎 名 幾 三 郎 殿
日 本 海 運 経 済 学 会 代 表	野 村 寅 三 郎 殿

- | | |
|---|----------|
| 4 | 追 悼 講 演、 |
|---|----------|

佐波先生の学問と生涯		
	京都大学経済学部	山田浩之殿
佐波先生の学問をふりかえって		
	甲南大学経済学部	前田義信殿
	大阪府立大学経済学部	谷山新良殿
佐波先生の学問を偲んで		
	大阪大学社会経済研究所	森嶋通夫殿
随筆のことなど	歌人・文芸評論家	上田二四二殿
佐波先生の病状経過報告		
	京都大学医学部	木村忠司殿
5 追憶談	友人代表	葛城照三殿
		山本安次郎殿
		青山秀夫殿
	狭衣会代表	山本喜朗殿
	ゼミナール学生代表	安間進殿
6 挽歌	京都大学グリークラブ殿	
7 遷厝記念論文集献呈		
8 遺族挨拶	佐波悠紀殿	
9 献花		
10 閉会	主催 京都大学経済学会	

葬儀に先立って総長室において叙勲の儀がおこなわれ、教授に対し、勲三等旭日中綬章がさづけられました。

当日、会場には、白菊で飾った清楚な祭壇に遺骨が安置され、正面に勲等が供えられ、その左側にデス・マスク、上方に教授の遺影がかかげられました。午後1時30分島恭彦教授の開会の辞で開始され、島教授および出口勇蔵教授の司会で会がすすめられ、御遺族佐波悠紀氏の挨拶ののち、全員献花し、午後5時30分とどこおりなく終了しました。その間、「佐波教授の俳句による男声合唱のための挽歌」の合唱や生前の佐波教授の声をおききして、在りし日の教授を偲んだのであります。

学内外からの参加者は約350名にのぼり、厳粛な学会葬をおこなうことができましたことは、御遺族、弔辞・追悼講演・追憶談をしていただいた諸先生、諸先輩をはじめ、参加者御一同の御厚情の賜ものであり、深く感謝する次第であります。

つぎに、弔辞・追悼講演・追憶談を収録します。なお、追悼講演のうち、木村忠司教授の「佐波先生の病状経過報告」および山本安次郎教授、青山秀夫教授、山本喜朗氏の追憶談は、京都大学経済学部同窓会の機関誌「同好」第9号（昭和43年5月発行予定）に掲載されますので、本誌では割愛しました。

弔 辞

経済学部教授佐波宣平博士の訃報に接し、京都大学を代表して心から哀悼の意を表します。

故佐波教授は昭和5年に本学経済学部を卒業され、同9年に経済学部講師、13年に助教授、21年に教授となられ、34年の間、本学において研究と教育に努めて来られたのであります。

教授は稀れにみる純粋な学者であり、海運、保険、交通各学界に大なる功績を残しました。また、教育者としても、つねに温かい心情と謙虚な態度で学生と交わり、多くの人々から尊敬の念と親愛の情を受けておられたのであります。

思えば、佐波教授は、昭和26年以来相次いでおそいくる病魔との絶えざる闘いの生活を送って来られました。その苦闘の中に、専門分野へのたゆまざる研鑽・努力の姿勢に対し、またそこから生みだされた輝かしい研究業績に対し、私は驚異と讃嘆の意を表さずにはおられません。

生前の佐波教授御自身の気持の中では、いくつかの未だ完成をみない、やり残した仕事があったかと思われますが、しかしそれも、教授の学究の徒としての純粋な精神をひきつがれた後進・知人・友人の方々の手で立派に完成されることと信じます。

教授は昨年末に行なわれた退官記念講義において、自からの余命いくばくもなきことを予言されました。悲しいことにその予言は的中したのであります。晩年の教授を苦しめた病魔、ガンに対して、私達は憎悪の気持で一杯であります。現代医学の進歩の前に立ちほだかり挑戦する憎むべき「ガン」に対して、教授は偉大な勇氣と闘志をもって立ち向われたのであります。

教授の示された勇氣と闘志は、私達に、「ガン」との闘いにおける勝利を確信させるものであり、その意味でガン征圧の実現する日の一日も早いことを教授に予言申し上げたい気持であります。同じ病魔に苦しんでいる人々やその家族が、今後の医学の進歩による光明を期待しうるならば、幸いです。

願わくば、故佐波教授の同僚、後進、友人ととともに教授の真摯な学究精神と業績を受け継がれ、学問発展のために努力されんことを、そしてこれこそが故人に対する最大のものはなむけであろうと信じます。

昭和43年3月12日

京都大学総長 奥 田 東

弔 辭

佐波教授の御逝去に際し、京都大学経済学部を代表して心から哀悼の意を表します。

佐波教授 あなたは本学御卒業と同時に小島昌太郎教授について研究をはじめられ、以来38年の長きにわたり、交通論、保険論を中心とする経済学の研究と指導に、たぐいまれな真摯さと情熱を傾けて来られました。

あなたは交通論、保険論の分野に近代経済学的思考を導入され、それによって、これらの分野は、日常業務の記述であることから脱して体系性を獲得し、また巨視的な視点から新たな光を当てられることともなりました。

あなたはまた数理経済学に非常な熱意を傾けられ、遡る年にも病苦をおして著作を生み出されただけでなく、停年前、最後の2年間、進んで数理経済学の講義に当られました。他方、あなたの研究の出発点にあったものは海運、保険の事実研究であり、歴史や事実に対する関心と学殖も、豊かに持っておりでになりました。

だが、あなたの業績を語るだけではあなたの半分を語るにすぎません。あなたは『さわやかな君子』というにふさわしい純粋な人柄によって、教え子たちへの愛情によって、またかくれた趣味の深さによって、同僚、後輩、教え子たちに敬愛され、慕われておりました。そうした人間性の中に、学問に対する烈々たる気魄が流れ、日本を戦火に導いた軍部や官僚に対する怒りが秘められておりました。こうした人となりの一端を、昨年12月6日、退官記念講義において、あなたは、あなたの業績の一部とともに示されたのでありました。その講義は、あなたの私たちに對するお別れの挨拶でもありました。その後なすすべもなく、今日の日を迎えることとなり、私たちは断腸の思いであります。御退官ののちもあなたが健康に恵まれ、なお仕残された研究を成就されることを、どれほど私たちも望み、あなたも望まれたことでありましょう。しかしながら学者としてあなたは学問一途の幸福な生涯をおくれたということもいえるでありましょう。あなたはその著作、教え子たちとともに、消えがたい精神的な火を、わが学部に残してゆかれました。あなたの残されたものを、わが学部はたいせつに守り育ててゆくでありましょう。

1968年3月12日

京都大学経済学部長 山岡 亮一

弔 辭

佐波教授は交通学会におけるまれに見る精力的な学者であり、すぐれた研究者でありました。運賃問題にたいする経済学理論の適用や海運事業の発達についての歴史的な解

釈を始めとして学問的には数々の未開拓の分野に分析を進められました。

こうした教授のすぐれた研究は、とかく沈滞し勝ちな学会に活力を与え、学会が前進する原動力となったのであります。

この意味におきまして、教授が逝去されたことは学会としてかけがいのない研究者を失ったことであり、大いなる損失であります。

さらに視界を社会に転じてみますと周知のとおりわが国の交通界は誠に多事多端であり、多くの新しい施策を必要としております。

したがいまして教授の真摯な研究に期待するところが誠に大でありました。

しかるに今や教授はこの世を去られ、残念の極みであります。

元来、教授は青年時代には頑健な身体所有者であられましたが、晩年は不幸にして、不治の病におかされました。

しかし闘病の中にも終始学者としてきびしい態度を堅持され、人々の心からの尊敬を一身に集められました。それだけに、ご家族の皆様の哀しみもひとしおと推察申し上げます。

ここに日本交通学会を代表して佐波教授のご霊前に心から哀悼の意を表するものであります。

昭和43年3月12日

日本交通学会会長 島 田 孝 一

弔 辞

日本保険学会理事故佐波宣平君に謹んでお別れの言葉を申し上げます。

去る2月29日御逝去の報に接し、かねて覚悟はしていたものの私達は大いに驚き大きなショックをうけ且つ悲嘆の涙を止めかねました。

君は年若くして保険学界に頭角を現わしました。豊富な経済学に関する知識を駆使して保険現象を解明しそれに独創的見解をつけ加えました。君には多数の著書、論文がありますがいづれも斬新にして卓抜な見解が展開されていました。従ってわが保険学会の会員のみならず実社会の人々を啓蒙されました。また君の構成した理論を批判するためには深刻な研究と考察を必要としました。かくて君は保険学の向上進歩について大きな役割を果たしたのであります。

それと共に君はわが学会を愛し多年に亘って尽力され、また大会や部会にも病を押し立てまで出席され、たびたび御研究の一端を報告してされましたがその真摯なる態度は到底忘れ得ざるものであります。よってわが学会は御病の篤きを知るや異例の措置を講じて御見舞申上げた次第であります。

今やわが学会は敬愛する君を失い寂寥の情に満ちています。今後の御研究を期待し御指導を念願していた私たちは御逝去が残念でなりません。君も心残りのことと存じます。

さり乍らわが学会は君の遺業を完成するために奮起することを誓いますから、どうぞ安らかに永遠の眠におつき下さい。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

昭和43年3月12日

日本保険学会代表 椎名幾三郎

追悼の辞

故佐波宣平教授は海運経済学会における第一人者であった。其の業績は日本国内に止まらず世界的にもかがやかしいものである。恩師小島昌太郎博士の指導の下に、若き日より保険・交通、特に海運経済に関する価値の高い数多くの論文を発表されたが長ずるに従ってその論作はますます精緻を加え論理は整然として極めて独創性に富むものになった。又時として欧米先覚者の有益な著作を翻訳して学界は勿論、実業界にも裨益するところ大であった。今次大戦後、教授は多年の研究蓄積をその明晰なる頭脳によって体系化し、大著「海運理論体系」に纏めて博士の称号を得られた。本書は学界に於いて鋭く光芒を放つ不朽の名著であり、後進学徒のために永く指針として仰がれる名作である。

教授はその後、愈々学問の領域を拡大し、精進の結果を続々公刊して学界において恒に指導的地位にあった。世上、往々学者の論作には、理論と現実と遊離するとの批難を聞くが、教授の言は実業界の人々をも深く傾聴せしむるものがあつた。

周知の如く数年前、教授は不幸にして病魔の冒すところとなり、度々手術をうけ、不自由な病牀生活を余儀なくされたにも拘らず、その苦難に堪え、学問的精進を続けられた超人的行動については、何人と雖も、頭のさがる思いがする。海運についてだけ云っても、古来、海運界に用いられた言葉を解明する「海運用語根源」という地道だが基盤的な仕事を雑誌「海運」に、死の直前に至るまで数年間、こつこつと掲載し続けたのである。

教授の人となりは直情径行で苦汁を忍び、苟も世俗に迎合せず、所謂古武士の面影がある。言いたいことは思い切って言い、書きたいことは思い切って書く決断がある。しかしその心の奥底にはつねに優しい純情が燃えていたことを私らは知っている。

また教授は文筆の人でもあつた。その随筆集「海運研究者の悲哀」とか「海だ 海だ」などは島国日本の為政者に海運政策の重要性を教えると共に、学界・実業界に海運研究熱の振興を強く訴えたものであるが、そのうちに教授のゆかしい人柄が偲ばれる珠玉の文学である。

教授が逝去された今日、私ら海運経済研究者の間には、何か大きな穴があいたような

淋しさを、感ずる。今更、教授の足跡の大きさを思うこと、一入なるものがある。ただ、教授の膝下からは多数の有能な人材が輩出した。その人達の活動によって、その穴を埋めて頂けることを切に願うと共に、私らも一臂の労を尽したいと思う。

在天の教授よ、冀くは安らかに眠られんことを。

昭和43年3月12日

日本海運経済学会代表 野村寅三郎